

ウォライタ語の引用句の性格

若狭 基道

motomichiwakasa@nifty.com

キーワード： ウォライタ語 引用句 節 イコン エチオピア諸語

要旨

ウォライタ語はエチオピア南西部で話されている、アフロアジア語族オモ語派に属する言語である。この言語では、引用句は全体としては節を構成しない。それは、引用句がイコン的な性格を有しており、他の通常の言語形式とは異質な文構成要素であることに由来する。ウォライタ語には同じくイコン的な性格を示す *preverb* と呼ばれる一連の語が存在するが、これらと引用句は多くの特徴を共有している。

1. はじめに

本稿は、ウォライタ語の引用句が節を構成しないことを論じた若狭 (2013) を補足するものである。その第6節 (最終節) でウォライタ語の引用句の統語論上の、あるいは文における性格に関してごく簡単に見通しが述べられているが、それを詳しく論じるものである¹。

ウォライタ語とは、エチオピア南西部の、首都アジスアベバから約400kmの道のりのソド (ウォライタ語で *Sooddo*²) を中心都市とするウォライタゾーンと呼ばれる行政単位で話されている言語である。

ウォライタ語はアフロアジア語族のオモ語派に属するとされている言語である。オモ語派は南北に大きく分かれるとの説に従えば、ウォライタ語は北オモに属し、その中でもオメト諸語

¹ 実は若狭 (2013) は採択に際し大幅な削減を求められたが、本稿で述べる内容の大半はその削減箇所を修正、補足したものである。本稿で改めて議論のきっかけを提供出来ればと思う。なお、当該削減箇所を他誌等で利用することに関しては『言語研究』編集委員会の許可を得てある。

² 近年のウォライタではラテン文字を用いてウォライタ語を表記する試みがなされているので、本稿でもその表記を採用する。その際に、現地の学校で使われているウォライタ語の教科書の表記を参考にした。原則として音韻表記であり、各文字は概して IPA から推測される音価を有しているが、注意を要するのは以下である：*c* [ʃ], *j* [dʒ], *q* [kʰ], *x* [tʰ], *y* [j], *ch* [tʃ], *dh* (喉頭化した [d]), *nh* [ɲ], *ph* [pʰ], *sh* [ʃ], *zh* [ʒ], ' [ʔ]。

現地の表記と同様に、文や固有名詞は大文字で書き始める。また、グロスを付ける関係上、ハイフンを適宜挿入し、形態素の境界を示した。

なお、本稿で使った略号は以下の通りである。

ABS (absolute, 絶対格。他の格が使われない所で使われる無標の格で、例えば動詞の直接目的語や肯定平叙名詞述語文の述語に使われる形である。いわゆる「能格 ergative」と対になる格ではない)、COM (comitative, 共格後置詞)、DAT (dative, 与格後置詞)、F (feminine, 女性)、IPFV (imperfective, 未完了形)、LOC (locative, 場所格後置詞)、M (masculine, 男性)、NEG (negative, 否定)、NOM (nominative, 主格)、OBL (oblique, 斜格。後続する名詞句を修飾する際の格)、OPT (optative, 希求 (命令) 形)、PFV (perfective, 完了形)、PL (plural, 複数)、REFL (reflexive, 再帰代名詞)、REL (relative, 関係節形 (連体形))、SG (singular, 単数)、SUBOR (subordination marker, 従属節標識)、1 (first person, 1人称)、2 (second person, 2人称)、3 (third person, 3人称)。

を代表する言語である。

形態面に関して言えば、大半の語は語彙的な意味を示す語幹と文法的な機能を示す語尾から構成されている。統語面に関しては典型的なOV言語であり、語順は日本語に似ている。同一節内の主語名詞句（その主要部は主格形で現れる）と述語動詞は人称・数・性に関して照応するのが原則である。ただし、主語名詞句は節の必須要素ではない³。

2. 若狭 (2013) の概要

若狭 (2013) はウォライタ語の引用を扱っている。ここで言う「引用」とは藤田 (2000: 9) が「所与と見なされるコトバを再現しようとする形で示すもので、そのコトバのまとまりが、そのようなものとして、文の構成要素として機能しているもの」と規定した「統語的な引用表現」のことである。若狭 (2013) が論じたことを簡単にまとめると以下ようになる。

- (1) ウォライタ語には完全な直接話法による引用も存在するが、大抵の引用には引用句末定形動詞（及びそれに照応する主語名詞句）が元の発話者の視点で、その他の部分が引用者の視点で引用される直接・間接混合話法が用いられる。
- (2) 3人称の通常の代名詞と再帰代名詞の現れ方から判断して、ウォライタ語の直接・間接混合話法における引用句は全体としては節を構成していない。

(1)の直接・間接混合話法に関して例を挙げる。

- (3) a. Nenaa-ra oott-ikke.
 貴方.OBL-COM 働く-NEG.IPFV.1SG
 (元の発話) 「私は君とは働かない」

- b. Tanaa-ra oott-ikke g-iis.
 私.OBL-COM 働く-NEG.IPFV.1SG 言う-PFV.3SG.M

(元の発話の聞き手が元の発話で表されていない第三者に対して) 「彼は、『私は君とは働かない』と言った⁴」

³ 本稿のデータは、主として筆者が 1997 年より断続的にアジスアベバとウォライタゾーン内の町ボディティ (ウォライタ語で Bodditte) で行って来た現地調査に基づいているが、取分け筆者が研究代表者である日本学術振興会科学研究費補助金 (若手研究 (B) 課題番号 1972093、平成 19~22 年度)、および京都大学の梶茂樹教授が研究代表者である同補助金 (基盤研究 (B) 課題番号 20320059、研究協力者として平成 20、23 年度参加) の成果の一部である。記して感謝申し上げます。主たるインフォーマントとして協力して下さったのはエチオピア暦 1935 年 (西暦 1942 年か 1943 年、生まれた月は本人も把握せず) 生まれの Alemu Koyra Balla 氏と西暦 1961 年生まれの Asela Gujubo Gutulo 氏である。改めて感謝申し上げます。

⁴ この文の日本語訳としては、「彼は、私とは働かないと言った」もある。ここでは助詞「と」の前の代名詞に間接話法の視点が採用され、元の発話の「君と」が「私と」になっている。だが、余計な混乱を避けるため、また(3a)を元の発話とした引用を含む文であることを明らかにするため、敢えて完全な直接話法を用いた訳にした。

(3b)の最初の語が1人称で現れる理由は、述語として用いられる定形動詞でもそれと照応する主語名詞句でもないこの部分には間接話法の視点が用いられているからである。元の発話では聞き手であり、したがって(3a)では2人称で表現されていた人物は、(3b)では引用者、つまり引用句を含む発話全文の発話者であるため、1人称で表現されるのである。だが、元の発話の述語定形動詞 *oott-ikke* 「私は働かない」には引用に際し直接話法の視点が採用され、結果として(3b)でも元の発話と同じ形が使われている。このように、直接話法の視点と間接話法の視点と共に用いられている(3b)の引用句(元の発話に対応した部分)は、文字通りに日本語に訳すと「私とは私は働かない」という、いささか奇妙なものとなる。

(2)に関してであるが、ウォライタ語において単一の節からなる単文の場合、3人称の通常の代名詞と再帰代名詞は異なった対象を指示するが((4)と(5)を参照)、従属節においては条件によってはどちらの代名詞も使える場合がある(例は(6))。

- | | | | | |
|-----|---|---------------------------|--|-------------------------------------|
| (4) | <i>Baass-i</i>
(人名)-NOM.M
「バサ(男性人名)は自分(=バサ)の家に行った」 | <i>ba</i>
REFL.OBL.3SG | <i>keett-aa</i>
家-ABS.SG.M | <i>b-iis.</i>
行く-PFV.3SG.M |
| (5) | <i>Baass-i</i>
(人名)-NOM.M
「バサ(男性人名)は彼(=バサ以外)の家に行った」 | <i>a</i>
彼.OBL | <i>keett-aa</i>
家-ABS.SG.M | <i>b-iis.</i>
行く-PFV.3SG.M |
| (6) | <i>Kuuss-i</i>
(人名)-NOM.M
<i>bana / a</i>
REFL.ABS.3SG / 彼.ABS
「クサ(男性人名)は人々皆が自分/彼(=クサ)を助けてくれた時、感謝した」
(ただし通常の代名詞 <i>a</i> を使った場合には「クサ(男性人名)は人々皆が彼(=クサ以外)を助けてくれた時、感謝した」の意味も可能。以下同様である) | <i>as-a</i>
人々-OBL | <i>ubb-ay</i>
皆-NOM.SG.M
<i>maadd-i-n</i>
助ける-SUBOR-LOC | <i>galat-iis.</i>
感謝する-PFV.3SG.M |

さて、単文の引用句を含む文であるが、以下のように両代名詞はそれぞれ異なった意味を表す。よって(4)(5)と同じく、全体として単文である、即ち単文の引用句自身は節を構成していない、引用句末の定形動詞と思われる部分は節の最後の要素となっていない、と考えられる。

- | | | | |
|-----|---|-----------------------------|-----------------------------------|
| (7) | <i>Ombbosh-a</i>
(人名)-NOM.F
<i>yaag-aasu.</i>
そう言う-PFV.3SG.F | <i>bana</i>
REFL.ABS.3SG | <i>maadd-adasa</i>
助ける-PFV.2SG |
|-----|---|-----------------------------|-----------------------------------|

(元の発話の聞き手(即ちオンボシエ(女性人名)を助けた人)が元の発話で表されていない第三者に対して)「オンボシエ(女性人名)は、『君は私を助けてくれた』と言った」(引用句は文字通りには「自分を君は助けてくれた」)

(8) Ombbosh-a o maadd-adasa
 (人名) -NOM.F 彼女.ABS 助ける-PFV.2SG

yaag-aasu.

そう言う-PFV.3SG.F

(元の発話の聞き手(即ちオンボシエ(女性人名)を助けた人)が元の発話で表されていない第三者に対して)「オンボシエ(女性人名)は『君は彼女(=オンボシエ以外)を助けてくれた』と言った」

ただし、全体としては節を構成しない引用句自身が節を含む場合はある。以下は引用句に関係節(連体修飾節)が含まれている場合である。

(9) Baalot-a bana / o maadd-ida
 (人名) -NOM.F REFL.ABS.3SG / 彼女.ABS 助ける-REL.PFV

as-atu-ssi miishsh-aa imm-a

人々-OBL.PL-DAT お金-ABS.SG.M 与える-OPT.2SG

yaag-aasu.

そう言う-PFV.3SG.F

「バロテ(女性人名)は『私を助けてくれた人達にお金をあげなさい』と言った」(引用句は文字通りには「自分/彼女を助けた人達にお金をあげなさい」)

よって、引用句を含む(7)と(9)の節構造は以下のように示すことが出来る。節を[]で表示した。語順がほぼ日本語と同じなので、日本語のみを示す。

(10) [オンボシエ(女性人名)は自分を君は助けてくれたと言った] (7)

[バロテ(女性人名)は[自分/彼女を助けた]人達にお金をあげなさいと言った] (9)

ウォライタ語の先駆的な研究である Adams (1983: 79)はタグミーミックスという理論に基づき Quote tagmeme なるものを設定している。彼によると、それは引用節を特徴付け、引用節においては常に存在しなければならず、quotation Predicator (「言う」という動詞に相当)に常に直接先行し、語られた言葉そのものから成るものである⁵。そして、Adams (1983: 280-281)では、若狭(2013)の分析に従えば直接・間接混合話法が用いられたごく普通の文を、真の直接話法で

⁵ 原文(英語)は以下の通り: The Quote tagmeme which characterizes the quotation clause, must always be present in a quotation clause, must always directly precede the quotation Predicator, and comprises the exact words spoken.

あれば予想出来ない文として非常に不思議がっている。こうしたことから Adams (1983)はウォライタ語で少なからず観察される直接・間接混合話法の存在を無視している上に、引用句を節と見做していると判断される。若狭(2013)の結論(上記(1)(2))はこのAdams (1983)の議論とは大きく異なっているものである。

3. ウォライタ語引用句の文中における性格：アイコンとしての引用句

若狭(2013)では、ウォライタ語の直接・間接混合話法による引用句が節を構成しないことを論じたが、以下ではこの理由を完全な直接話法による引用句をも視野に入れて考えてみたい。端的に言ってしまえば、直接・間接混合話法において、引用句末の定形動詞と呼んで来たものはもはや普通の動詞ではなくなっている、ということであるが、本節では以下、ウォライタ語の引用句末の定形動詞が普通の動詞ではなくなっている理由をアイコンという通言語的に有効な概念を用いて説明する。次に明らかにアイコン的な性格を有しているpreverbが引用句と多くの類似点を共有していることを述べ、引用句がアイコンであるとの説を補強する。

まず、引用句が通常のシンボルとしての言語記号ではなく、アイコン、即ち対象との類似性に基づいた記号と見做し得る点に関して述べる。この考え方自体は筆者の発案ではない。藤田(2000: 39-85)が既に詳細に論じていることである。藤田(2000)は日本語を扱ったものであるが、その「引用表現の原理」に関する議論はどの言語にも当てはまるものと思われる。即ち、どの言語でも、引用句は対象である「所与と見なされるコトバ」を写像ないし模倣した記号と考えられる。したがってどの言語でもその能記(signifiant)と所記(signifié)は有契的に結び付いており、それゆえに引用句は能記と所記が恣意的に結び付いた通常のシンボルとしての言語記号とは趣を大きく異にしていると考えられる。

誤解を恐れずに非常に単純化して言ってしまえば、引用とは一種の物真似である。物真似であれば、引用句が真似たものがいくら「(所与とみなされる)コトバ」であるとは言え、普通の言語学的分析だけでは扱い切れない現象が出て来るのも当然である。そして物真似に上手下手があるように、引用句にも「所与とみなされるコトバ」に極めて似ているものもあればそうでないものもあることになる。あるいは引用句とは、例えば「さっき食べてたの何？」という質問に対して通常の言葉で「リンゴだよ」と答えるのではなく、リンゴそのものを差し出して答に代えるような伝達行為、再び藤田(2000: 42)の用語を借りれば「実物表示」に匹敵する表現であると言ってもよからう。実物表示であれば、引用句が実物表示をした対象がいくら「(所与とみなされる)コトバ」であるとは言え、普通の言語学的分析だけでは扱い切れない現象が出て来るのも当然である。そして実物表示といっても当該事物と同類の別物をもって代えることがあるように、引用句にも「所与とみなされるコトバ」と全く同じとは言い切れないものもあることになる。

繰り返しになるが、どの言語でも、物真似としての性格を、実物表示としての性格を、「所

与とみなされるコトバ」の写像・模倣としての性格を全く持たない引用など考えられないであろう。とすると、どの言語の引用句も、少なくともいくつかはアイコンとしての性質を有していることになる。したがって、引用（句）の全容を解明しようと思えば、引用句に普通の言語記号とは異質なアイコン性を全く認めない分析など考えられないことになる。この点はなかなか気付き難いかと思われるが、しっかりと確認しておきたい。

ここで引用を含んではいないし書記言語に限定される例ではあるが、通常の言語記号の中に全く異質なアイコンがはめ込まれているのに全体として言語表現として成り立っている、藤田（2000: 60）に見られる興味深い例を見ておこう。

(11) 彼が大きな音で**⁶ので、みんな驚いた。

上で**は非言語的な要素（イラスト）であり、対象の類似に基づいた記号であるから、アイコンである。このアイコンは日本語の要素としては当然異質であり、日本語学的な分析が適用出来ないものではあるが、それでも(11)の文表現において何らかの役割を演じていると言える。だが、そうは言っても**を節（あるいはその他の言語的な要素）だと考える人はいないと思う。それではこの**は文(11)において何かと問われると普通の言語要素ではないアイコンであると答えるしかなく困ってしまうのであるが、ともあれ、周辺的かも知れないがこうした表現が成立すること自体は注目に値すると思われるし、引用句の本質を理解する際にも助けとなるとされる⁷。

さて、アイコン性が高い引用句、「所与とみなされるコトバ」との類似の程度が高い引用句としては、若狭（2013）では殆ど扱わなかったが完全な直接話法によるものが代表であろう。無論、その中にも様々な段階が考えられ、語句の改変等を一切行っていない場合の方がそうでない場合⁸よりもアイコン性は高く、元の発話者の音韻論的に非弁別的な声質や口調まで真似ていればそれだけアイコン性は高いと言えるが、概して完全な直接話法による引用句はアイコン性が高いと言ってよいだろう。

ここでアイコン性の高い完全な直接話法による引用を題材に、文の要素としての引用句の性格を考えてみたい。結論から言えば、完全な直接話法が用いられている引用句は、全体として節を構成していないと思われる。以下の日本語を例に取って考えよう。

⁶ 原文では**の箇所にはラップを吹いている人間のシンプルなイラストがあるが、再現が難しいので**で代用する。藤田（2000: 60）によるとこうした表現方法は架空のものではなく、朝日新聞に掲載された「サザエさん打ち明け話」に数多く見られるとのことである。

⁷ 恐らく(11)で本当にポイントになっているのは、「ある記号体系の中に異質な記号体系が混じること」であり、アイコンかどうかはどうでもよいことである。ただし、本稿の主題である引用句はアイコンなので、当面、通常の言語記号の中に異質なアイコンが混入しても言語表現として成立し得ることを確認しておくのが分かり易いであろう。

⁸ 直接話法にも語句の改変が見られることに関しては、更には元の発話が常識的な意味で存在していない場合すらあることに関しては、例えば、藤田（2000: 159）や鎌田（2000: 60）を参照されたい。

(12) 昨日松島君は僕に「明日君のうちへ行くよ」と言った。(鎌田 (2000: 108) より)

上において、引用句「明日君のうちへ行くよ」は節を構成していると言えるだろうか。確かに、元の発話としては節と呼べるものである。だが、(12)全体においては、この引用句が文(12)の一構成要素をなしているのは確実だとしても、それは(従属)節と呼べるものであろうか。少なくとも他の節と同列に扱えるものであろうか。この場合、当該引用句はその引用を含む文の中にアイコンないし実物表示として言わば単にはめ込まれているだけの異質な要素ではないだろうか。譬えて言えば、(11)における**のイラストに相当するような要素ではないだろうか。

このことがもっと明らかになるのは、藤田 (2000: 48) が論じているような、外国語や「日本語のきまりを逸脱した不適格な語列」が引用句として文の一構成要素となっている場合である。例えば以下のようなものである。

(13) ジョンは即座にThat will doと言った。

上において英語の部分That will doは日本語の文(13)の構成要素ではあっても、日本語の節として分析するのは不可能である。少なくとも、他の日本語による節と同じ道具立て(品詞だとか語順の規則だとか)で分析するのは不可能である。さらには、この英語部分を任意の言語の明らかな非文で置き換えたとしても(13)の日本語表現自体は文法的な文として成立する。何ならば人類の言語でなくてもよく、猫の鳴き声のそっくりな物真似や雷雨の音声を器用にもそっくり模写したものであってもよい。ここまで来ると、引用句に相当する部分、つまり猫の鳴き声や雷雨を真似た部分が日本語の節を構成すると考えるのは無理であり(もしこれが日本語の通常の節であると言うのなら、どういう句がどういう統語規則で組み合わされているのか、またいくつの音素から成り立っているのか教えて戴きたい)、日本語以外の言語の節が混入したと考えることすら不自然である。引用句に相当する物真似部分は、外部の文構成要素と全く関係がないとは言えないが、アイコンないし実物表示として日本語の文の中にはめ込まれただけの非言語的で異質な要素であり、(11)における**のイラストに相当するものであると言わなければならない。

そうであれば、(12)における完全な直接話法による引用句も程度の差こそあれ、物真似と同じく高いアイコン性を有しているのであるから、文にはめ込まれた異質な要素であり、全体として通常の節を構成しているとは言えないことになる。引用句は言葉を模倣したものであるだけに紛らわしいが、やはり引用句外の部分との本質的な差は認めなければならないであろう。そして皮肉にも元の発話を忠実に再現すればするほど、通常の言語としての性質を失い、単なる物真似に近くなるのである。

この辺りの事情はウォライタ語でも同じであろう。残念ながら若狭 (2013) で用いた3人称代名詞の現れ方を観察する手法を適用して証明することは出来ないが、以上の考察は日本語にの

み適用される性質のものではないと思われる。

それでは若狭 (2013) が主として扱った直接・間接混合話法による引用句はどうであろうか。ここでは引用句末の定形動詞には元の発話者の、即ち直接話法の視点が採用される。したがってこの部分には、上述の完全な直接話法による引用句に関する議論がそのまま当てはまる。つまり、アイコンないし実物表示として日本語の文の中にはめ込まれただけの非言語的で異質な要素であり、(11)における**のイラストに相当するものである。当然通常の意味での節を構成する力はない。これが(2)を説明する理由であると思われる。

ただし、直接・間接混合話法を用いた引用句において引用者自身の視点が採用された部分は、単なる引き写しとしてではなく引用者自身が語っている側面があるため、その分シンボルとしての通常の言語に近くなっているであろう。したがって、場合によっては(9)のように従属節を含むこともあり得る。とは言え、「所与と見なされるコトバ」を完全ではなくとも模倣・模写する意図がある以上、直接話法の視点が採用された部分には及ばないにしてもアイコンとしての性格を認めることは可能であろう。また、意味上も、そして広い意味での文法上も直接話法が用いられた引用句末定形動詞にかかっていると考えられる。したがって直接・間接混合話法を用いた引用句全体もアイコンと見做せるであろう。ただし、完全な直接話法による引用句全体よりはアイコンとしての性格がかなり弱いであろう⁹⁾。

次に、ウォライタ語に存在するもう1つのアイコンについて考察する。それは、*preverb*と呼ばれるものである。*preverb*とは、Azeb (2001)の用語ではGroup II ideophoneと呼ばれるものであり、Ferguson (1976)が指摘しているようにエチオピアの諸言語に広く観察されるものである。それは意味的に無色の補助動詞（自動詞的に使われる場合、通常は「言う」を意味する動詞）と共に用いられる。*preverb*自身の文法的性格は今後の研究に俟たねばならない点が多いが、ideophone「表意音」という用語からも推察される通り擬声語・擬態語的な性質を多分に有していると考えられており、もしそうならば問題なく対象の類似性に基づいた記号、即ちアイコンである。Ferguson (1976: 72)によれば名詞的であるかあるいは間投詞的である¹¹⁾。ウォライタ語の

⁹⁾ なお、ウォライタ語には存在しないが完全な間接話法による引用句はさらにアイコンとしての性格が弱いと予想される。ひょっとしたら、アイコンと見做すことは不適当であるかもしれない。これが節を構成するかどうかは個別言語ごとに検討しなければならないだろう。

¹⁰⁾ なお、ウォライタ語で直接・間接混合話法が用いられる理由であるが、「所与とみなされるコトバ」をそのまま引くのは、可能ではあるし実例にも事欠かないが、ある意味で不自然である、という事実と関係していると思われる。物語等とはかく、通常の伝達の場合には「所与とみなされるコトバ」があった場合、それをそっくり繰り返すのではなく、自分なりに内容を把握し、翻案し、必要に応じて元の言葉を取捨選択したり逆に補ったりし、場合によっては語の置き換えや翻訳までして伝えるのが普通であろう。その上で、自分の発言が「所与と見なされるコトバ」に基づいていることを示したい、あるいは示さざるを得ない時もあることは充分に考えられるし、少なからぬ場合にそうであろう。そうした相反する要請に対する解決策の1つが、ウォライタ語の直接・間接混合話法であると考えられる。即ち、大部分は引用者の視点から、時に語句の改変をも交えながら語ることで完全な直接話法に伴う不自然さを避け、一方で元の発話の主要部である末尾の定形動詞とそれと照応する主語名詞句に引用の場とは異なる元の視点を採用することで「所与と見なされるコトバ」の存在を明示しているのである。

¹¹⁾ Ferguson (1976: 71-72)の関連する原文（英語）は以下の通りである：... there are many verbs consisting of a noun-like or interjection-like 'preverb' plus a semantically colourless auxiliary, commonly the verb 'to say'.

場合、圧倒的多数のpreverbは、その最後の母音がiかuであることから判断して、副詞的な機能を持った名詞類であると判断してよさそうである¹²。preverbは他の有意な語と同根の場合もあるが、そうではない場合もある¹³。ウォライタ語からpreverbとその補助動詞の組み合わせの例を幾つか挙げる。g-は「言う」という意味の、oott-は「する、働く、作る」という意味の動詞の語幹である。

(14)

kirqqi g- 「どうしても思い出されない」

sirphphi g- 「黙る」

sirphphi oott- 「黙らせる」

xoqqu g- 「高められる」

xoqqu oott- 「高める」

Cf. xoqq-aa 普通名詞「高さ、高いこと」 (-aaは基本形である絶対格形の語尾)

2つほど、例文を挙げる。

(15) kophph-i-n kophph-i-n kirqqi
 考える-SUBOR-LOC 考える-SUBOR-LOC (preverb)

g-iis.

言う-PFV.3SG.M

「考えても考えてもそれが思い出されなかった」

(16) shodhdh-ee waass-iy-a-g-aa
 蛙-NOM.SG.M 叫ぶ-REL.IPFV-NMLZ-ABS.SG.M

ir-ay sirphphi oott-iis.

雨-NOM.SG.M (preverb) する-PFV.3SG.M

「蛙が鳴いていたのを雨が黙らせた」

¹² ウォライタ語の普通名詞は比較的稀ではあるが-i 語尾または-u 語尾を伴って副詞的に使われることがある。また、その語尾が(ほぼ)固定してしまい、語形変化を(ほぼ)失ってしまったと見做される語も存在する。詳細は Wakasa (2008: 198-209)を参照されたい。ただし、擬声語・擬態語としてのpreverbの場合、子音で終わるのを避け、単に口調を整えるためだけに添えられたものである可能性も否定できない。

¹³ すると、擬声語・擬態語的なものから同根の他の語が生まれたのか、元々シンボルとしての言わば普通の語から副詞的に使われるpreverbが生まれたのか、が問題となる。もし後者であれば、そのpreverbはアイコンとは呼び難いことになろう。ただしウォライタ語では、preverbの語幹に接辞を附すことで他の語を派生している場合がそれなりに見られる。したがって、総じてpreverbに擬声語・擬態語的性格、即ちアイコン性を認めてもよいだろうと思われる。

更なる例はAzeb (2001)、Wakasa (2008: 653-658)を参照されたい。

ウォライタ語の引用句もpreverbも共にアイコンである以上、類似した性質を共有していても不思議ではない。「言う」に相当する動詞が補助的に後続し得る点、それ自身では節を締め括る力がない点、等である。

日本語に関して、擬声語・擬態語と引用句の類似を指摘した研究が幾つか存在することにも注目してよいだろう。例えば、柴谷 (1978: 96-99) は擬声語・擬態語に付加される「と」を引用標識とみなし、共に副詞節として分析している。また、鎌田 (2000: 74-78) は、直接引用句と擬声語・擬態語には共に「繰り返し表現 (冗語的表現)」、それも「2度の繰り返し」が「かなり頻繁に使用される」ことを指摘している。

ついでに言えば、エチオピアの諸言語に見られる特徴として、Ferguson (1976: 71-72)は、動詞「言う」に後続された直接引用らしき節が拡張的な用法を含めて頻繁に使用されることと、(14)に挙げたようなpreverbと動詞「言う」からなる複合動詞が多数存在すること¹⁴を挙げている¹⁵。この2つの特徴は無関係なものではなく、アイコンを多用するという点で共通点を有する。したがって、この2つの特徴が揃ってエチオピアの諸言語に広く観察されるのも全くの偶然ではなく、これらの言語がアイコンの使用を好むことに由来していると考えられる。

勿論、共にアイコンであるとは言え、preverbと引用句には違いも多々見られる。

元来preverbは複雑な事態を、音声を模写する形で、あるいは共感覚に訴えて名付け、抽象化し、語彙化したものである。語彙化されたものである以上、数は将来増減する可能性を含みつつも有限であるし、長さも一定の範囲に収まるのは当然である。また、大抵の場合に副詞的な語彙として機能する以上、それに相応しい語尾を有するようになるのも自然なことである¹⁶。

一方引用句は、藤田 (2000: 9) の言葉を借りれば「所与と見なされるコトバを再現しようとする形で示すもの」である。「所与と見なされるコトバ」は理論上無限に存在するし、場合によってはかなり長いものでもあり得る。したがって、preverbとは異なり、引用句はその種類(数)において無限であり、長さはかなり長くなることもあり得る。また、模倣の対象となる「所与と見なされるコトバ」は、ウォライタ語の言語形式である以上、ウォライタ語の複雑な語形変化を含んでおり、引用句にもそれが反映されるため、preverbとは異なり、アイコンとしての性格の特に強い引用句末の動詞に話を限っても様々な形式が現れる。

その他、a) preverbは自動詞として使われる場合はg-「言う」と組み合わせられるのは可能でもyaag-「そう言う」とは組み合わせられない(少なくとも筆者は観察したことがない)が引用句の

¹⁴ Ferguson (1976)による番号で言えばそれぞれ G5 と G6 である。Ferguson (1976: 71)から前者に関する箇所(英語)を引用しておく: The language has as a frequent construction a clause which seems to be a direct quotation followed by a form of the verb 'to say' (e.g. the gerund 'having said'). Often this clause is actually a direct quotation, which is preferred in the language to indirect quotations, but it may be an expression of intention or appearance or manner, not implying any quotation of actual speech.

¹⁵ Tosco (2000: 345-346)はこの特徴をクシ系言語の影響と見做している。なお、Tosco (2000)は preverb ではなく ideophone という語を用いている。

¹⁶ ただし、preverb に固有の品詞性を認めることが妥当かどうかは別問題かも知れない。藤田 (2000: 55-63) の議論を参照されたい。また、註 12 の末尾も参照されたい。

場合はどちらの動詞も殆ど意味の区別なく用いられる、b) *preverb*は多くの場合 *oott*-「する、働く、作る」を用いた対応する他動詞形が存在するが引用の場合は考えられない、といった違いも見られるが、いずれも意味的に説明可能な、さして問題にならない違いであると思われる。

a)に関しては、*yaag*-「そう言う」の *yaa*は離れた場所を示す指示詞に由来しており、だから時として長大な、遙か離れた前方から始まる引用句を受けるのには相応しくても、語形が短く直前に存在している *preverb*を受けるには相応しくないからであろう。b)に関しても、引用句+「言う」は自然であるが、引用句+「する、働く、作る」は意味が通らないからであろうし、そもそも *preverb*自身にも *oott*-「する、働く、作る」とは共起しないものがある。

以上、総じて引用句と *preverb*には類似している特徴が多く見られることを述べた。共通点が多いから同じ範疇（今の場合はアイコン）に属する、との論は成り立たないが、同じ範疇に属するものであれば共通点が多くても不思議ではない。引用句と *preverb*の共通点の多さは、これらが共にアイコンであることを傍証していると思われる。

4. 今後の展望

以上、ウォライタ語に関し論じて来たが、この問題はウォライタ語のみが関与するものではないと思われる。

まず、エチオピアで広く普及しているアムハラ語（アフロアジア語族、セム語派）に関して言えば、Leslau (1995: 777-779)が紹介しているように、引用に際し若狭 (2013: 73-76) 及び本稿の(1)で述べたような現象が見られる。それは決して特殊なものではない。したがって、筆者自身はアムハラ語の引用を詳しく調査してはいないが、若狭 (2013) 及び本稿と同じ結論が適用できるのではないかと予想している。つまり、Leslau (1995: 777)が「アムハラ語は非常にしばしば英語なら間接話法を用いる所に直接話法を用いる¹⁷⁾」と述べているのは正しくなく、実は節を構成しない直接・間接混合話法による引用が少なからぬ場合に用いられているのではないかと予想している。

更には、第3節で言及したように、Ferguson (1976)によれば、豊富な *preverb*や引用表現の頻繁な使用はウォライタ語に限らずエチオピアのアフロアジア語族の諸言語の特徴である。すると、これらの言語でも、若狭 (2013) 及び本稿でウォライタ語の引用句に関して述べた結論が大筋では適用される可能性がある。Ferguson (1976: 71)にある、エチオピアの諸言語で直接話法が間接話法より好まれる、との記述も再考されなければなるまい¹⁸⁾。

一般言語学的な観点からも、若狭 (2013) 及び本稿で扱った現象は興味深いと思われる。管見に偶々入ったものから挙げれば、例えば鎌田 (2000: 95) は「間接引用句は他の従属節表現（例えば連体修飾節）と同じような文法的特徴を持ったれっきとした従属節なのである」と言う¹⁹⁾。また、Quirk et al. (1985: 1029-1030)も英語における間接話法による引用句を節と見做して

¹⁷⁾ 原文（英語）は以下の通り：Amharic very often uses direct speech where English would use indirect speech.

¹⁸⁾ 原文（英語）の該当箇所は註14に挙げた。

¹⁹⁾ ただし、その具体的な根拠は、少なくとも本稿筆者には不明である。

いる。Bugaeva (2008: 37)はアイヌ語の直接話法引用句を一種の副詞節、同じく間接話法引用句を主たる述語の目的語として機能する補語節と解釈している²⁰。これらの考えが正しいとすると、引用句が全体として節を構成しないウォライタ語（あるいはエチオピアのアフロアジア諸語）は、これらの言語とはかなり異なった言語であるということになる。また、ウォライタ語には一貫した間接話法であることが明白な引用は見られないが、通言語的に見てこれはどうなのか。その他、アフリカ諸言語に見られるいわゆるlogophoricity²¹や、Jespersen (1922: 123-124)の言う転位語 (shifters)²²に関する議論とも関係して来よう。

若狭 (2013) と本稿は、一部日本語の議論を援用したとは言え、あくまでもウォライタ語の具体的な現象の記述とそれに基づいたウォライタ語の統語論的・文法論的考察を主眼とするものである。しかし、それは他のエチオピア諸語の研究や一般言語学的な研究にも寄与し得る可能性を秘めていそうである。それらに関しては稿を改めて論じられれば、と思う。

参考文献

- Adams, Bruce (1983) A tagmemic analysis of the Wolaitta language. Unpublished doctoral dissertation, The University of London.
- Azeb Amha (2001) Ideophones and compound verbs in Wolaitta. In: F. K. Erhard Voeltz and Christa Kilian-Hatz (eds.) *Ideophones* (Typological Studies in Language, Volume 44), 49-62. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Bugaeva, Anna (2008) Reported discourse and logophoricity in southern Hokkaido dialects of Ainu. 『言語研究』 133: 31-75.
- Ferguson, Charles A. (1976) The Ethiopian language area. In: Marvin L. Bender, J. Donald Bowen, Robert L. Cooper and Charles A. Ferguson (eds.) *Language in Ethiopia*, 63-76. London: Oxford University Press.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』, 研究叢書260. 大阪: 和泉書院.
- Hagège, Claude (1974) Les pronoms logophoriques. *Bulletin de la Societe de Linguistique de Paris* 69: 287-310.
- Jespersen, Jens Otto Harry (1922) *Language: Its nature, development and origin*. London: George Allen & Unwin.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』, 日本語研究叢書第2期第2巻. 東京: ひつじ書房.

²⁰原文 (英語) は以下の通り: In this paper, the quote of... construction qualified... as DRD [=direct reported discourse] is interpreted as a kind of *adverbial clause* and that of IRD [=indirect reported discourse] is interpreted as a *complement clause* functioning as an object argument of the main predicate, i.e. the reporting verb.

²¹logophoricity とは Hagège (1974) の提案によるものであるが、例えば Bugaeva (2008: 75) の日本語による簡潔な説明によれば、「ある種の引用構文において引用者を指示する特別な形式」がロゴフォリックなものである。

筆者自身は本稿で考察したウォライタ語の引用句の統語的性格のすべてが logophoricity で説明できるとは考えない。だが、両者の体系を比較するのは面白いテーマであろう。

²²例えば人称代名詞のような「状況に応じて意味の変わる一連の語 (原文英語: A class of words... whose meaning differs according to the situation (Jespersen (1922: 123)))」のことである。

- Leslau, Wolf (1995) *Reference grammar of Amharic*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析 生成文法の方法』 東京：大修館書店。
- Tosco, Mauro (2000) Is there an “Ethiopian language area”? *Anthropological linguistics* 42 (3): 329-365.
- Wakasa, Motomichi (2008) A descriptive study of the modern Wolaytta language. Unpublished doctoral dissertation, The University of Tokyo. (http://www.world-lang.osaka-u.ac.jp/user/liccosec/africa/AF_Wakasa_DrDissertation.pdfで閲覧可能)
- 若狭基道 (2013) 「ウォライタ語の引用句を含む文の統語構造」 『言語研究』 143: 69-80.

Nature of Quotations in the Wolaytta Language

Motomichi Wakasa
motomichiwakasa@nifty.com

Keywords: Wolaytta, Quotation, Clause, Icon, Ethiopian languages

Abstract

Wolaytta is an Omotic language of the Afroasiatic family spoken in southwestern Ethiopia. In this language, a quotation does not constitute a clause by itself because it is iconic; thus, it is a sentential constituent that differs from other linguistic forms. In addition, Wolaytta has a series of iconic words called “preverbs,” with which Wolaytta quotations share many features.

(わかさ・もとみち 明星大学非常勤講師、跡見学園女子大学兼任講師、白鷗大学非常勤講師)